

横浜市立永田台小学校

問い合わせ先: 電話番号 045-714-4277

URL(学校

HP): <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nagatadai/>

I 学校の概要

1 児童生徒数, 学級数, 教職員数

(平成28年3月現在)

児童数	506名
学級数	17学級
教職員数	30名

2 地域の概況

学校はマンションや団地に囲まれているが、地域の方々は、花や木を植え整備し、緑で住みやすい町作りをしている。しかし、団地も年数を経て、横浜市内でも最も高齢化が進んでいる地域となっている。

3 環境教育の全体計画等

環境教育の目標

自分たちの身近な環境を見つめることを通して、よりよい環境を作っていこうとする児童を育てることを目指す。

環境に対する豊かな感受性の育成

自分自身を取り巻くすべての環境に関する事物・現象に対して、興味・関心をもち、意欲的にかかわり環境に対する豊かな感受性をもつことができるようにする。

環境に働きかける実践力の育成

環境保全のため、どのような生活様式や実践的行動をとるべきかなどを考えて行動することや、自ら責任ある行動をとり、協力して問題を解決できるようにする。

環境に対する見方や考え方の育成

身近な環境や様々な自然の事物・現象の中から自ら問題を見つけて解決する力とその過程で獲得する知識と技能を身に付けることで、持続可能な社会の構築につながる見方や考え方を育む。

II 研究主題

1 研究内容

「サステイナブルスクールを志向する環境デザイ

ンについての研究」

III 研究の概要

1 研究のねらい

「作る、できる、発表する」ことだけに満足することなく、「影響、変容、変革」を求める子どもの姿を目指している。観測を通して、多くの気づきを高め、課題意識をもち、身近な実践を行っていくことができるようにする。

2 校内の研究推進体制

(1) 研究推進体制

① 校内体制

校長、副校長、教務主任、環境部を中心に計画

・研究・情報発信を行う。

② 関係諸機関との連携

・CASIO 計算機、若尾さんによる「命の授業」

・横浜市水道局による出前授業

・エコプロダクツ 2015 参加

・JAL 空エコ教室出前授業

・エコライフチェックシート

・エコ絵日記

(2) 観測体制

日々の観測は以下の通りである。

・環境委員会

雲量・雲形の観測

最高気温、最低気温、現在気温の観測

校内への発信

(3) 観測機器などの設置状況

① 百葉箱(デジタル温度計)

② 湿度計(各教室配置)

③ デジタルカメラ

④ 記録ファイル



3 研究内容

(1) グローブの教育課程への位置付け

- ①身近な環境、自然事象に目を向け、「影響変容・変革」を求める子どもの育成を図る。
- ②日々の観測を続けることで、世界の環境に目を向けることのできる子どもの育成を図る。

(2) グローブを活用した教育実践

I. 全校の取り組み

1. 高学年による「JAL 空エコ教室」

写真やパイロットの話をもとに、空からみた環境の変化を捉えました。氷の面積が減っていることや、緑の数が減っていることは、空からの写真で明らかだった。

また、JAL が取り組んでいるエコ活動を知り、企業もエコ活動に取り組んでいることを知った。

2. エコライフチェックシート

3年生以上が取り組んだ夏休みに取り組んだ。また、11月には日々の取り組みを、個別支援学級が代表で発表、表彰式に参加した。翌日の朝会では、発表の報告と合わせて多くの小学生がエコライフチェックシートに取り組むことで、アフガニスタンの果樹園が増えていることを知った。

II. 各学年の取り組み

1. 1年生

年間を通して、学校探検を行い学校には色々な人たちが関わっていることに気付いた。

育てたあさがおの種を2年生からもらい、育て方を教わった。育てていく中で、種から芽が出て、つるが伸び、花が咲く、そして種へ、命はつながっていることを知った。このことを通して、「のどが渇くと水を飲みたくなる」「お腹がすけば、食べ物がほしくなる」など、植物と自分自身を関連付けて考えることができるようになった。植物の生長には、水や肥料などの栄養が必要ということに気付き、栽培活動に意欲をもった。繰り返し観察、水やりをした。

また、ヒヤシンスを育てるものとの違いにも気付き、植物によって命の形には違いがあることを知った。



2. 2年生

オーストラリアの絶滅危惧種動物が置かれている状況を知った。動物を守るために活動をし



ている人たちがいることを知り、自分たちが身近なことで出来ることはないか考えた。

友達と考える中で、ゴミを道に捨てないこと、自分達が学んだことを周りに広めていくことが大切だと感じた。

ゲストティーチャーを招いての授業では、環境の変化について学んだ。地球温暖化や、気候変動について知り、自分達が将来よりよい環境で生活するには、今何をすべきなのかを考えた。電気を細目に消すこと。無駄遣いをしないこと。など、今できることを積み重ねていくことが大切だと考えた。

3. 3年生 「伝えよう、永田台のまち」

4月当初に行った社会の「まち探検」や理科の「自然の観察」、総合的学習の時間の「伝え



よう永田台のまち」の学習を通して、永田台のまちの良いところを発見してきた。

普段、何気なく遊んでいる場所もよく調べてみると、江戸時代後期に編集された風土記に載っている古道が残っていたり、団地の池にかえるがいることを見付けたりした。

活動を通して、自分たちの住むまちは、たくさんさんの自然に囲まれていたこと、自分たちを大切にしてくれる人がたくさんいることを知ることができた。

まちの良い所や、自分達を見守ってくれる温かい人がいることを知り、そこから自分たちもまちの一員として何ができるかを話し合った。

「きれいな永田台のまちがいい。」との子どもの発言から校内清掃や、地域清掃に取り組んだ。清掃活動から、まちに落ちているゴミの多さに気付き、今後も地域清掃を続けていきたいとの思いをもつ子どもが増えている。また、ゴミを種類ごとに分け、何がゴミをして多く落ちているのかを調べたり、分別して捨てることの

(別紙様式2) 環境のための地球規模の学習及び観測プログラム (グローブ) 推進事業中間報告書

大切さを考えたり、まちの課題を自分たちで解決しようとしたりする姿が見られた。

4. 4年生

「地球のいのちを守ろう」

ゴミ工場見学で、これ以上ゴミを増やすと地球の温暖化がますます進むことを知った子どもたち。ゴミスリム(3R 夢)アクションを進める中で、ゴミの問題は地球の環境の問題につながっていることに気が付き始めた。「このままでは地球のいのちが危ない」との思いで、子どもたちは自分の課題を設定した。

「温暖化を戻したい CO2 止めるぞチーム」「ゴミも食品ロスもへらさなきゃ できるエコチーム」「絶滅しそうなきものを助けたいチーム」「エネルギーは無尽じゃない 大切に使わなきゃチーム」「生活が苦しい子 学校にいけない子を助けたい ハッピー平和チーム」のどこかに所属し、ビデオや写真などの教材に出会ったり、自分から調べ活動を進めたりして、問いをもつ、考える、話し合う、また問いをもつ、の学びのサイクルを回していった。

教師は、まず子どもが仲間と共に試行錯誤できる時間と場を確保した。また、いつ、何に出会わせ、子どものどんな姿をどんな場面で共有するかに気を配り、自分の思いを自信をもって伝えられる場をつくる等して、子どもが主体的に学べる環境をつくるようにした。

2月には学習してきたことを生かし「地球のいのち」をテーマに2~4人で大きな絵に今の思いを表現する活動を行った。作品には10才の「これからの地球環境を自分たちの力でよくしていく」「今後もこのテーマについて考えつづけたい」という思いがあふれていた。



5. 5年生

「挑戦の瞬間90」

5月当初より、学校の田んぼを活かして米作り体験を行ってきた。田起こし、代掻きと地域の方の協力を経て、稲を育てた。

10月には稲を刈り、脱穀、精米の作業を行っている。米作りから田んぼに住む生き物や米の種類、地域の方とのつながりについて子どもたちは考え始めた。



米について学習を始めたグループは、世界の米

の種類や米から作られるものについて調べた。米の大きさについて学んでいき、日々の食の大切さを感じた。生き物に関するグループは、生き物の生物多様性、食物連鎖について考え、田んぼと自分たちのつながりについて考えることができた。地域の方たちはなぜ自分たちに関わってくれているのか、その方たちの思いを知り、自分たちができることを考えていった。

また、学年を代表の10名がエコ活動に取り組んでいるアマダホールディングスという企業へ見学に行った。ごみの廃棄量をゼロに近づけるゼロエミッションや工場内に緑を植え、生物の憩いの場とする活動を行っていることを知った。

企業の取組と学校で行っているグリーンカーテンやごみの分別とが似ていることに気付き、環境問題に取り組む大切さを考えることができた。

6. 6年生

「未来への一歩」

よりよい未来を築くために、多くの大人に出会い、友達と語り合うことで自分の一歩について考えた。

夏には、平和について考えました。戦争による被害は人だけでなく、動物や植物の命、居場所をも奪うことを知った。友達と意見を交わしていくうちに、白黒ははっきりつかない課題があることも知った。友達との語り合いの中で、はっきりしない課題のために、自分たちは考え続けていかなくてはならないこと、できることから行動に移すことを考えた。

秋には、「世界の食卓」と題して、発展途上国と日本の食卓を比較しました。あたり前のようにある水や食糧について見直した。

冬には、ミラスタから派遣されたイベント会社の方との出会いがあった。

ゲストティーチャーの方は、限られた予算

の中で、お客様の要望に応えるためにブースの企画をしていた。

一つのブースにかかる費用や材料の量などを知ることが、これまでエコプロダクツ展などで見てきたブース見方を変えるものであった。



7. 4・5組

「いのちの水」

私たちの生活には欠かせない、けれどつつい無駄遣いしてしまっている水について様々な体験を通して考えてきた。

(別紙様式2) 環境のための地球規模の学習及び観測プログラム(グローブ) 推進事業中間報告書

まず、普段の生活の中で水をどれくらい使っているのかを調べることから始めた。洗濯機の水をいっぱいにするには2ℓペットボトル52本分も必要なのだということに気づき、生活の中で相当な量の水を使用しているのだということを知った。

また、調べ活動の中で世界の水事情についても課題をもつようになった。たとえば、アフリカの一部の地域では、水不足で亡くなる人が多かったり、茶色く濁った水を飲食に使っていたりすることに気づいた。自分達の水の使い方と世界の水事情を比べ自分達にできることはないかを考え、学んだことを劇にして発信することにした。劇の発表を通して周りの人達にも水の大切さを再確認してもらうことができた。

取り組みを通して、授業に使ったペットボトルの水を「もったいないから植物にあげよう」という声が子どもからあがった。水を大切に使うという意識が単に言葉だけでなく、実感を持ったもの



のようになったのではないかと思う。

III. 環境委員会の取り組み

「気温の観測と雲量・雲形の観測」



日々の常時活動として、最高気温・最低気温、雲量・雲形の観測を行ってきた。

観測する手段・方法を知り、記録を正確に取ることを目的とした。また、記録から季節と天気を結び付け、家庭科の住まい

方と合わせて、生活の工夫について全校に発信した。

活動に継続的に取り組んできた成果として、全校へ発信したいメッセージの質が高まってきた。「植物が増えるよさを伝えたい。」「雲を見ると天気が分かることを伝えたい。」「春と秋は、ほぼ夏と冬みたいだね。環境の変化かもしれない。」など、学校の植物や空の見方が変わってきた。

IV. 職員の取り組み

1. 環境部を中心に、永田台の環境教育の見直し・系統表の作成

来年度からの取り組みスタートを目安に、今ある学習を水・森林・エネルギー・生物多様性・防災・気候変動に分け、適応・削減に色分けした。また、来年度から気候変動を中心に取り組む方法や内容について職員全体で疑問や考えを共有した。

2. ビオトープの整備

地域の方と協力し、ビオトープの整備に取り組んでいる。地域の方には、専門的な部分を中心に指導、監督をお願いし、職員は児童の指導、飼育の方法を知ること、継承していくことを中心に進めている。

ビオトープが整備されていくことで、学習の幅が広がるとともに、子どもたちの興味関心の幅が広がることを期待している。



IV 研究の成果と第2年次に向けての課題

1. 気候変動、適応に関する学び

系統分けをしたところ、水、エネルギーに関する分野、削減については学びが充実していた。一方で、気候変動、適応に関する分野が少なかった。2年次は、気候変動、適応を意識して学びをつくっていく。

2. ビオトープの整備に伴い、職員全体での把握、継承

ビオトープの整備が進み、子どもたちの学びの場が充実しようとしている。環境部を中心にビオトープ管理マニュアルを作成し、どの職員でもいつでも分かるようにしておく。

V 研究第2年次の活動計画

1. 系統表の充実と実践の充実
2. ビオトープの改善と維持